

津島佑子

黙

だんまり

市

いち

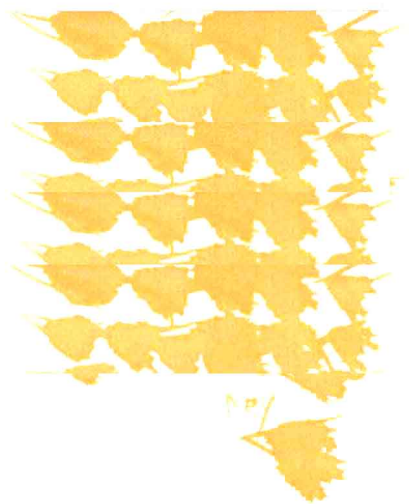
新潮社版

黙

(だんまりいち)

市

津島佑子



新潮社

黙市（だんまりいち）

発行——一九八四年一月二〇日
四刷——一九八四年三月二五日

定価——二一〇〇円

著者——津島佑子

発行者——佐藤亮一

発行所——株式会社新潮社

住所——東京都新宿区矢来町七一

電話——業務部(03)二六六—五一一
編集部(03)二六六—五四一一

振替——東京四—八〇八

印刷——株式会社三秀舎

製本——加藤製本株式会社

©1984 Yuko Tsushima, printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取り替えます。



ISBN 4-10-351001-3 C0093

縣市／目次

7—20 彼方

21—38 夢の道

39—60 幻

61—80 野一面

81—101 塵

103—118 沼

119—139 あの家

141—156 貝塚

157—174 黙市

175—197 石を割る

199—220 浴室

222 初田一寛

默市

装画
坂本
寧

彼
方



見慣れた自分の部屋である。

鉄の梯子段を登り、通路を渡って、ドアの鍵を開け、室内に入る。入ったところがダイニング・キッチンで、六畳の部屋が続く。なにも変わりはない。窓があり、自分で買い置いた家具がある。

けれども、壁に、今まで気がつかなかった引き戸が一枚見える。ああ、そう言えば、と思いつながら、それを開けてみる。こちら側と同じような部屋。長い間、閉じこめられていた空気のにおい。台所が続く。八畳か、十畳ぐらいいはありそうな広い台所。そして、板の間の小さな部屋。また、ガラス戸がある。そこを開けると、三和土のある玄関。ゲタ箱が開け放しになっていて、使い古しの運動靴や、草履が残されている。玄関の脇にも、ドアがひとつある。開けて、覗いてみる。日当たりの良い、磨きこまれた廊下が見える。そこから、この家の本当の場所らしい。……

こんな夢を、女はよく見るようになっていた。もちろん、このように自分の部屋から直接、進んでいく夢ばかりではなく、むしろ、自分の部屋とは関係のないところからはじまる夢の方が多かった。たとえば、高校時代の同級生と街角で出会ったり、勤め先で人のけんかを眺めていたりするのだが、それがどんなきつかけで自分の部屋に戻ってしまうのか、とにかく、ふと気がつくと、自分の部屋がどこかにつながり、もうひとつの出口を持っていることを知り、そこに気持を奪われてしまっているのだ。

たとえば部屋のなかに、下に降りる小さな階段を見つけて、なんだろう、と思い、そこを降りてみる。降りきったところが土間になっていて、物置き小屋のようだが、広さはかなりある。こわれかけた板戸があるので、開けて、外に出る。細い道が続いている。見上げると、自分のよく知っている光景が眼に入る。なんだ、こういうことだったのか、と納得いって、そうなると、この出口は、自分が一人で自由に使ってもかまわないのか、と胸を膨らませる。

あるいは、道をまわり、アパートの裏手に行くと、いつからそういうことになっていたのか、塀も柵もなく、直接、かなり大きな神社の境内に続いている。参拝に来ている人の数も多い。アパートを背に、境内の奥に進むと、荒れた庭園が広がる。古い石塔が並ぶ陰気な場所もあるが、左の方は、木の数も少ない、明かるい原っぱだ。その先は、なんの目印もないが、ある屋敷の庭につながっているらしい。当然、そちらに踏みこんではいけない、ということになっているのだろう。振り返ると、木材を乱雑に組み上げたような、四

階建てだか、五階建ての、大きな建物が見える。これからはせいぜい、ここを楽しまなければ、とささやかな喜びを感じている。

あるいは、部屋の窓から顔を突き出すと、コンクリートで固めた小学校の校庭が見える。外に出て、自分の部屋を外側から見直すと、ちょうど鳩舎のような形で、校舎の端につながっている。珍しさに、見知らぬ校舎に入り、一階の廊下を歩く。教師らしい男に見つかり、かつてにこっちにできてはこまりますよ、こどもたちがみたら、なんとおもうか、と言われる。あわてて、廊下の突き当たりの便所の脇の階段を登り、ドアを開け、更に続く、人気のない、埃っぽい廊下を走って、一枚の戸に行き着く。そこを開けると、もとの自分の部屋なのだ。なるほど、だからこの部屋がどんな場所にあるのか、今まで誰からも教えてもらえなかったのか、と少し気落ちしている。でも、たとえ、出て行くことはできなくても、眺めとしては広々としていて、気持がいいではないか、と慰めも感じている。

あるいは、部屋の裏に、患者で賑わっている開業医の待合室が見えたり、レストランの厨房が現われたりする。……

自分の借りている部屋に、格別の不満を持っているつもりはなかった。人に自慢できるような部屋だとはさすがに思わないが、自分の収入だけでこの都会に住むには、この程度のものだらう、と仕事先から帰っても、改めて落胆などは感じたことがなかった。それどころか、学生の時の下宿を思い出すと、満足感すら湧いた。当時は、便所も炊事も共同の、たった四畳半の部屋だったのだ。でも今は、同じアパートで、夫婦に赤ん坊の三人で

住んでいる人もいるのだし、一人で住むのには、贅沢だとさえ言えるぐらいの部屋なのだ。ところが、その自分の部屋がひそかにどこかに続いている夢を見る。夢のなかで、自分の部屋の思いがけない拡がりを、少しの疑いもなく信じこみ、感心し、はやばやとそれまでの自分の日々を忘れ去って、気持ちを浮き立たせている。希望に、すっかり包みこまれてしまっている。それで、眼が醒めると、勢いよく部屋のなかを見渡し、もうひとつの出入り口を壁に探さずにはいられなくなる。しかし、壁は壁のままだし、両隣りは、その声だけは聞き慣れているが、まともに挨拶したことがない人の部屋なのだ。自由に出入りするどころか、なかを覗いたこともない。わざわざ窓を開けて、アパートの大きさを外側から確かめなければ、納得できないことすらある。夢のなかで得た喜びは、なかなか消えない。それでもとにかく、この部屋にもうひとつの出入り口など、あるはずがないのだ、と少し経てば、思い諦めるしなくなる。そして、自分が住んでいるのは、こんな閉ざされた場所ではなかったのか、と気持ちが沈んでしまう。

いやな夢を見るものだ、あんな夢さえ見なければ、この部屋になにも思うことはないままでいられるのに、と女は腹立たしくなり、今更、自分はなにを願っているのだろう、と恥かしさにも襲われる。

学生の頃からすでに、二十年近く、アパート住まいを続けていた。部屋の狭さを苦痛に思っている時期も確かにあったが、その頃には、自分の部屋の夢など見なかった。勤め先でも、今はチーフということになっていて、以前は、仕事のことで、思い悩んだり、苛

立ったりすることが多かったが、そうしたこともほとんどなくなってしまった。それなのに、なぜ今頃になって、自分の部屋がどこかに続く夢を見はじめるようになったのか、納得がいかない。が、夢は夢なのだ。女は自分の見る夢などに意味を持たせなくなかった。

その夜も、女はいつものように十一時過ぎてから銭湯に行き、三十分ぐらい経って部屋に戻った。そこに、電話が鳴りだした。女は緊張して、受話器を取りあげた。夜更けに掛かってくる電話で、楽しい思いを味わうことは滅多にない。にもかかわらず、咄嗟に、なにかを期待してしまっている。一体、だれなんだろう。

女性の声が耳もとに響いた。男性ではなかった、と女はまず肩の力を抜く。

へもしもし……ごめんなさい、こんな夜遅くに……今、少し大丈夫かしら……

子どもの頃、親同士のつきあいで、互いの家の庭先でよく一緒に遊んでいた、二歳年上の女性だった。二年前に、銀行で偶然に出会った。何年振りに見る顔だったろう。その時、彼女の母親がそばにいなかったら、見分けることはできなかった。母親の方は、ほとんど変わっていなかった。互いに住所を教え合ったりしたのだが、訪ねることもないまま過ぎてきた。彼女も、やはりこの都会で一人住まいを続けている、と聞き、それで、わざわざ自分から近づこうという気持は消え失せてしまった。もつとも、彼女に夫がいる、子どもがいる、ということだったとしても、それで近づきたいとは思わなかったのに違いないのだ。

へ……ほんとに、こんな時間に、突然、変なことをおうかがいして、申しわけないんですけれど……お互いの子どもの頃をよく知っているってことで、うかがうだけでもうかがってみれば、もしかしたらって……ふっとあなたのことを思い出して、迷ったんですけど、まあ、だめでもともと……でも、万が一ってことも、世のなかにはあるんじゃないかと、そんな気もして……今、ほんとにかまいませんか？

へええ……大丈夫よ。それで……

女はできるだけ気楽な声を出して、答えた。自分がなにを期待されているのか、見当がつかなかった。保険の勧誘とか、なにかを買って欲しいとか、その程度のことなのかもしれない。女は、今の自分は余分なものにどのぐらいの金を使えるのか、とぼんやり計算しはじめた。

へあのう……わたしね、実は、引越したいと思っているんですよ。それで、いろいろ部屋を見て歩いているわけなんですけど、思い通りの部屋がなかなか見つからなくて。……今よりほんの少し広ければいい、たった二畳分でもいい、と思っているだけなんですけど、そうなると、家賃もびっくりするほど、高くなってしまうのね。こんなこと、もちろん、あなたなら、充分、御存知でしょうけれども。……それで、こちらが払えそうな家賃で、今より広いところ、というところ、あるにはあったんですけど、それが暗いんですよ、とっても。この年になってからあんなところに住むのか、と思うと、なんだか、もうがっかりしてしまつて。……だけど、急にね、わたしにしては、とてもいいことを思いついたんです。つ